綿毛はどこへ

横浜市立森中学校
松山　晃基

卒塾して２年が経ちます。昨年度は、同僚と研修会へ参加し、英語科の和む会を５回開催しました。AET もすべて参加し、強い関係を築くことができました。日々のやり取りの中で互いにリスペクトし合い、遠慮なく議論を交わせる素敵なチームになれたことを嬉しく思います。

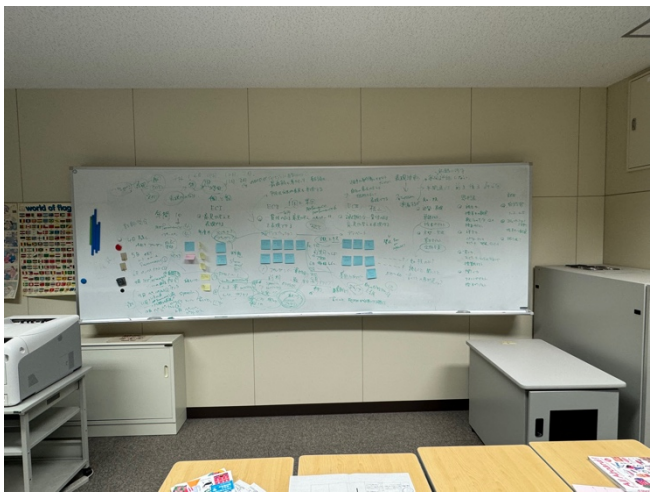
こうして人と人が繋がることの大切さを学べたのは、中嶋塾のおかげです。ここでの学びが、仲間との関わることの大切さや指導にいきています。本当に感謝の気持ちでいっぱいです。これからも学びを深めながら、一歩ずつ成長していきます。引き続き、どうぞよろしくお願いいたします。

1.　学びを紡ぐ

昨年の夏、恵比寿の銀座ライオンで、本田先生と山内先生と再会しました。懐かしい話に花を咲かせ、楽しい時間があっという間に過ぎていきました。会も終盤に差し掛かった頃、本田先生から「年度末に何か楽しいことをやろう」と提案されました。私は、その一言に、新たな挑戦への期待が膨らみ、心が弾みました。

一方、日々の授業では、授業中にプライベートな話をする生徒、困っている友人に“ You can do it!!”と励ます生徒、わからない時に“I need your help!”と素直に助けを求める生徒――互いを支え合いながら、英語の力を伸ばし、心も育っていく。そんな姿に驚きと喜びを感じる毎日でした。

こういった指導が実現できたのは、中嶋塾での学びがあったからです。新年度が始まる前に教科内で指導要領を読み解き、教育目標などと組み合わせ英語科で「育った生徒像」を作成しました。「育った生徒像」に必要なスキルを洗い出し、①Cando リストの作成し、それをもとに②年間指導計画をたてました。上記の①と②は作成して終わりではなく、同僚と単元の振り返りを重ねたり、より良い指導を模索し、次年度に繋げるために朱書きを入れて保存しています。そんな折、昨年の 12 月に本田先生から連絡が届き、「新年度をデザインする春休み」のセミナーで講師をしてほしい――その誘いに、迷うことなくすぐに返事をしました。



中嶋塾で学んだことをもとに英語科で実践し、他の先生方へも分かち合い、お伝えできる場に講師として参加できることが素直に嬉しかったです。

2.　膨大な情報との向き合い方

今年度は、何か困ったときには原典に立ち返ることの重要性を教科内で共有しました。高等学校指導要領を読んでいると、前後の目標とのつながりを理解することが不可欠だと実感しました。指導要領の文章量は膨大だから読まない。抽象的な表現が多いため理解できない、といった理由は言い訳でしかありません。もちろん、読み解くのは容易ではありません。私自身も、これまで原典を深く確認せず、独自の指導を行ってきたからこそ、その重要性を改めて認識しました。

指導要領や指導要領解説の語句や表現の意味を理解し、中教審から示されている資料などを確認すると作成の経緯を理解することができました。しかし、これらの膨大な情報から、伝えたい内容を厳選できず、20 分にまとめるのは困難でした。結果、スライドは 30 枚近くに膨れ上がり、要点を絞る必要性を痛感しました。セミナーがある週に山田先生や山内先生に確認してもらい、「松山さんが、一番伝えたいことは何ですか？」と助言をいただき、最終的に引き算をして、要点を整理してスライドは１０枚に収まりました。

3.　共通の課題

セミナー当日、スライドがうまく表示されず、会場に一瞬の沈黙がありました。その静けさを救ってくれたのは、本田先生のユーモアある一言。場が和み、笑いが広がりました。このタイミングを活かして、私は参加者の皆さんに２つの質問を投げかけました。

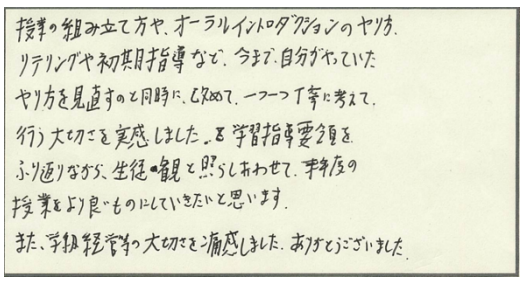
「どんな時に学習指導要領を読みますか？」「最後に指導要領を読んだのはいつですか？」

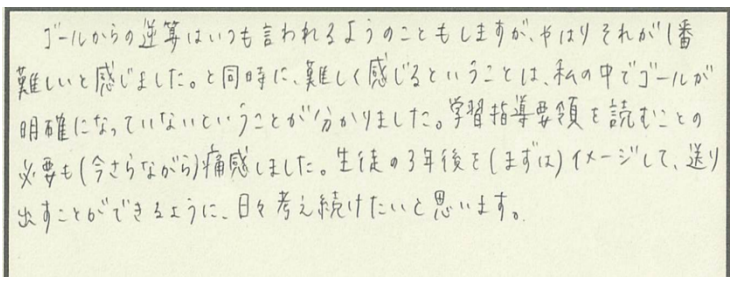
ペアでの共有をお願いし、会場を歩いて耳を傾けると、「研究授業の前くらいかな…」　「うーん、いつだったかな……？」そんな声が聞こえてきました。

参加者の経験年数にかかわらず、「指導要領を普段から読んでいる」という人は少数派のようです。これは何を意味しているのでしょうか？

- 方向性を定めきれていないのか？
- 「教科で生徒をどう育てるのか」のビジョンが共有されていないのか？
- そもそも、指導要領の言葉の定義が正しく理解されていないのか？

授業のやり方や方法論はさまざまありますが、「そもそも、私たちはどこに向かっているのか？」という問いに、共通の答えを持っていないことが、この状況から見えてきました。


授業の組み立て方や、オーラルイントロダクションのやり方、
リテリングや初期指導など、今まで、自分がやっていた
やり方を見直すのと同時に、改めて、一つ一つ丁寧に考えて、
行う大切さを実感しました。学習指導要領を
ふり返りながら、生徒の観と照らしあわせて、単元の
授業をより良いものにしていきたいと思います。
また、学級経営の大切さを痛感しました。ありがとうございました。


ゴールからの逆算はいつも言われるようのこともしますが、やはりそれが1番
難しいと感じました。と同時に、難しく感じるということは、私の中でゴールが
明確になっていないということが分かりました。学習指導要領を読むことの
必要も(今さらながら)痛感しました。生徒の3年後を(まずは)イメージして、送り
出すことができるように、日々考え続けたいと思います。

4.　どんな場所でも花は咲かせてみせる

今年度、県立高等学校から公立中学校へ異動になりました。異動に際し、管理職面談で横浜市の中学校校長会で成果が上がっていることから、「５ラウンドを是非」と求められました。しかし、どんなに

優れた種も、土壌が整っていなければ芽は出ません。

指導法も同じです。ただ導入すれば効果が出るわけではなく、生徒が主体的に学び、力を伸ばせる環境を整えることが先決だと考えます。耕さずに種をまいても、実ることはありません。新天地では、まず土を耕し、水を与え、学びの芽がしっかり根を張る環境をつくることから始めていきます。焦らず、生徒一人ひとりの成長を支えながら、最適な方法を模索していきます。

大切なのは「生徒がワクワクする授業とは何か？」を常に問い続けることです。そのためには、教師は仮説を立て、検証し、改善を繰り返す。指導法ありきではなく、生徒の実態に応じた計画を立て、準備を徹底していきます。